アーバントリップ実行委員会

都内に展開する 3つの医療・教育の現場を訪ねる

國永　裕史

3月18日、第77回JIAアーバントリップに参加した。「先進医療と癒しのための教育・診療の場に学ぶ」と題し、『帝京大学板橋キャンパス大学本部棟』『帝京大学医学部附属病院』および『成増高等看護学校』の3施設を見学させて頂いた。各施設の設計担当者より直接説明を受けながらの見学は、大変有意義な体験であった。朝9時、埼京線十条駅から10分程歩くと、一際大きな建物が見えてきた。最初の見学先『帝京大学板橋キャンパス大学本部棟』である。

■医療の進化に柔軟に対応できる教育空間

10時、見学を開始。教室や総合図書館等々多くの部屋を見学させて頂いた。そのすべてをご紹介できないのが残念だが、本稿では、日々進化する医療に対応した適切な教育を提供するために、本施設に施されたフレキシビリティに着目したい。各学部の研究室フロアでは、フリーザー室や培養室を1カ所に集約し共用化することで、各研究室の実験機器レイアウトの柔軟性を確保していた。また、設備系配管ルートを外部に計画することで、実験機器の増設や設備の更新を容易にしている。外部に設備配管を出す研究施設は多いが、外部の設備シャフトが、柱形と呼応したリズミカルな外観を構成し、意匠的なデザインとしても違和感なくまとまっていることが印象的であった。

■自然を味方につけた癒しの空間

13時、2番目の見学先となる『帝京大学医学部附属病院』へ向かった。病院棟は公開空地を挟んで大学本部棟の向かいにある。2階、3階にある外来待合は、敷地南西側の石神井川の曲線に合わせてアールを描いており、外壁面がガラスのカーテンウォールとなっているためとても開放的である。石神井川は桜並木の名所であるから、春には待合空間が桜色で溢れるだろう。癒しの空間を実現するために、仕上げや照明で意匠的に細工を施すのも設計屋冥利に尽きるが、美しい自然を味方につけることが何よりの近道であると改めて実感させられた。病棟の7、12、16階は、フロアのほぼ半分のスペースをスタッフエリアとして確保し、医療機能の充実を図ると共に、日進月歩する医療の現場において、高い将来拡張性を確保できる計画となっている。

■連帯感の感じられる一つの学び舎

帝京大学病院をあとにした一行は貸切バスに乗り、最後の見学先『成増高等看護学校』を訪れた。80人程度が学ぶ3階建てのこじんまりとした看護学校は、大規模な帝京大学板橋キャンパスとは極めて対照的である。各教室とホールの間仕切壁の上部をガラスとすることで、各室相互のつながりを生み、建物全体が一体感のある空間となっている。また、設計者のこだわりがつまった仕上げも多く見られた。例えば3階ホールや講堂の天井は、化粧吸音ボードに黒色のEP-G仕上げとなっており、色のつかない吸音穴部分がまるで夜空の星のように美しい仕上がりであった。

今回は都内に展開する3つの医療・教育の現場を訪ねることができた。今回の見学を通して多くの貴重な示唆を提供して頂いた各設計担当者様並びに主催者様に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

キャンパス中央を東西に貫く公開空地（帝京大学板橋キャンパス）

3階ホールと講堂の天井（成増高等看護学校）